



ICT 海外ボランティア会会報

No. 61

2015年11月10日(火)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail info@ictov.jp

目次

◆特別寄稿

37年のNTT時代を振り返って —自分史的自負と反省—

元NTT代表取締役副社長 村上 治氏

◆特別寄稿

図面が画けることはパターンがあること

ICT海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆海外グラフィティ

ゲート最後の恋 —マリエンバートの悲歌—

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆技術協力の思い出

KMITプロジェクト

元JICA専門家 加来 億一氏

◆イタリア縦断かつ跳び紀行

元シニア海外ボランティア 北垣 勝之氏

◆第20回 海外情報懇談会 開催のお知らせ

事務局

特別寄稿

37年のNTT時代を振り返って ― 自分史的自負と反省―

元NTT代表取締役副社長 村上 治

【本稿は、第19回海外情報談話会での講演の要約版で、講演者村上 治様のご寄稿です。本談話会は去る2015年10月28日に開催され、3時間に及ぶ熱のこもった心情溢れるご講演でした。なお本稿では「出生からNTT入社前について」は省略されています。(事務局)】

昭和28年電電公社入社。中央・鈴鹿学園で約6ヵ月養成訓練の後、技師長室調査課搬送係に配属され、伝送屋の印半纏で公社人生をスタート。約1年後、東北ルートの搬送電話東京端局の本田中継所に配属され、回線統制業務等を研修の後、関東通信局計画部電信市外課を経て、昭和31年暮に施設局伝送課へ配属された。局長は米澤 滋さん、課長は北原安定さんの下で確り鍛えられた。3年後の昭和35年計画局伝送課伝送路網係長に、後に総務理事になる武田輝雄さんにもご指導を頂いた。当時、丁度第三次五ヵ年計画作成の頃で、幹線伝送路の有無2ルート化の原則を盛り込んだ。



講演中の筆者

昭和37年、東京通信局計画部回線課長へ。部長は山内正弥さん。その頃市内局番3數字化が行なわれ、大きな誤接問題が起きており、先輩調査役と今後への再発防止対策等を纏めた。又東京市内中継の伝送品質向上の施策について検討した。

昭和38年9月、計画局回線課補佐へ。自動局に比べ極端に遅れていた未改式局の市外サービス改善に取り組んだ。その間昭和39年に入り、日米会話学院で勉強させて貰うことになったが、何故か？英語が要らない沖縄に3週間の出張命令、全琉自動即時化のコンサルという事で行って見たら、沖縄第2の都市名護が自動改式するが、那覇との市外回線を何回線にすべきかと悩んでいた。そこで全琉全局間の市外通話の交換証を洗いざらい集めて貰った。それから全局間の通話の交流状況表を作って貰い那覇一名護間の所用回線数を算出した。ついでに沖縄本島の番号計画、市外伝送路計画等いわば全琉五ヵ年計画のようなものを作成し提出した。それを評価したか？RTT（琉球電電）新里総裁が一夕琉球料理と琉舞で接待してくれた。

昭和41年3月1日、自動改式の早暁諏訪電報電話局長を拝命、300人を超える局員を預かる。労働組合も若僧の局長にビックリ、しかし数ヵ月でほぼ全局員のハートを掴み、その後は順調な電話局運営が出来たと自負している。又全ての業務がある訳で大変勉強になった。当時の人達とは今でも付き合いの場を持っている。

昭和43年、北海道通信局施設部長に。日ならずして十勝沖地震が発生、名前が悪い。北海道は殆んど被害はなく、青森県甲地の無線中継所電源が喪失し、本州と北海道のマイ

クロ回線が全断、北海道が沈没したのではとの騒ぎに、幹線ルート2ルート化の方針に従い第2マイクロルートが数ヵ月後に完成の予定であったのに誠に残念な事であった。

その後札幌オリンピックへの準備、データ通信部設置等に取り組んでいたが、本社ではアナログ電子交換機を導入し、総合通信網を構築するとの話が伝わって来た。これに総裁も施設局長も乗って、廃止寸前の臨時市外局設計室が総合通信網設計室に生き返る事になった。

電子交換機導入でどうして総合通信網が出来るのだと言っていた所、昭和45年1月の異動で総合通信網設計室調査役の辞令、これにはホトホト参ってしまった。設計室長は水沢慶太郎さん、大変真面目な方ですから、総合通信網とは何かを雑誌「施設」に解説しろとの御命令、そんな中で海外電気通信協力会（会長元公社総裁梶井 剛さん）が、ソ連・東欧へ使節団（約4週間）を出す。公社からも参加されたいとの事。本来この種の団には公社の幹部が参加するのだが、共産圏との事もあり総裁はNo。しかし公社から出ないとレポートを書く人が居なくなるということか？小生にお鉢が廻ってきた。水沢室長はお冠、中々行けない所で見聞を広めさせて頂いた。

翌年広域時分制の工事が行なわれる事になり、水沢さんが対策室長に、設計室長には広田憲一郎さんが着任され、実質上電子交換機設計室として機能することになってホットした。電子交換機の発信番号送出機能を使ってKDDと打合せ、国際自動即時化を実現した。この機能はその後詳細課金方式、ファクシミリ網、そして通信自由化の競争体制で必須のものとなった。

昭和47年、今度は設計室から壁一枚隣の**技術局通信網部門担当調査役**へ、18年振りの技術局であったが、前任・前々任者共、研究所育ち学級肌の方々に、相務まるかという感じであった。しかし非電話系通信に電話網を開放する事になっており、その為の技術基準の作成、又電話網利用に当って、その実力についての解説も必要で担当者は忙殺されていた。

電話網利用だけでなく、非電話系通信の為にデジタル専用網を作ろうという動きが大企業等であり、総裁から対策案を提出せよとの事で、小口技術局長より通信網部門へ御下命が下った。研究所を含め予め検討を進めていたDDX網構築の提案を昭和48年早々の総務会に提案すべく、年末年始の時期であったが、各局次長に何度かお集まり頂き、総務会提出資料を取り纏め、新年最初の総務会で御諒承を頂き、実用化のスタートを切った。その後種々の議論を重ね、回線交換とパケット交換2方式を開発することとしたが、もう少し先が見えたらパケット交換方式に絞れたのではと反省している。

設計室の後半から技術局通信網時代にかけて、施設局長を卒業された北原総務理事から、土曜日の午後、数人が召集され勉強会が行なわれた。これからはデータ通信もあるが画像通信も、特にファクシミリを普及させる。それには端末機を格段に経済化、ネットワークも電話網では長距離でA4 1枚の伝送に3分機でも3~400円の通信料になってしまう。これでは普及する筈はない という議論の中で、ユーザーから原稿を電話網で受け、デ

ィジタル化してディジタル網で伝送、着信側でアナログ信号に戻して送達、同報通信等のサービスも可能なファクシミリ網を構築すると言う自論を提起した。

昭和49～50年兵庫通信部長を拝命。荒木幸之助前部長からの引継ぎでは、兵庫管内では業務成績も良く、組合の幹部も良識派で余り苦勞されない筈、唯一つ気になるのが管内の一管理者の転勤挨拶で部落差別につながる発言があり、これが燃え出すと大事になる心配あり。果たせるかな、これが6回の糾弾会に展開され、最後は通信局長にも御出席頂いてやっと解決という事になった。しかし本当に立派な通信部で、この位なことが無いと申し訳ないような通信部でした。

昭和51～54年6月、技術局次長へ。神戸での2年の間に通信の世界は非電話系の需要が本格的になっていた。担当は15年振りに伝送、無線、線路、画像等で伝送担当。各種の通信需要に対応すべく光ファイバー伝送方式の開発、画像・映像応用のVRS、キャプテンシステム、携帯電話の開発、更には交換機のディジタル化と課題山積であった。更に火を付け放しのファクシミリ通信網の開発も、北原技師長から「待っていたぞ、あれをやろう」と言うことで、公衆ファクシミリ通信システム研究会をスタートした。第一回目には技師長が激励に現われ、ハッパをかけるという気の入れようであった。自ら提案し、昭和56年にサービス開始する迄5年を要したが、実用化まで一環して手掛けさせて貰ったのは技術者冥利に尽きるものがあった。

昭和54年7月、技術局長拝命。次長時代からの開発案件も続々と実験開始、実用化した。VRS、キャプテンシステム、ファクシミリ網、DDX、自動車電話等で、ISDN開発がメインテーマであった。当面の課題として、INSモデルシステム、筑波科学技術博対策等であった。

昭和59年1月 理事に選出されたが、さし向き無任所、7月にINSモデルシステム推進部長に。

昭和60年4月、電電公社民営化 取締役技術企画本部長、常務会にも出席。ISDNも実用化が近くなったが、国際標準が後追いで決まって来る。社長・副社長の了承を得て、少し遅くなるが国際標準に合わせて実用化する事とした。筑波万博には天皇陛下も行幸されたが、スウェーデン国王も関係者を引連れて来日され、科学万博さらには企業等も訪問された。そのお返しとして国王からスウェーデンへ招待があり、訪問団の一員として選ばれ参加。国王招宴もあるとの事で、タキシード・靴等を新調して出発。大男の国スウェーデン、借着は全く合わず正解であった。

昭和61年6月、常務関西総支社長拝命。丁度総選挙の最中で、着任早々主だった立候補者事務所へ挨拶廻りでスタート。中山正暉先生以外は初めての方々だった。

在任中、新電報疎通設備TXAS導入、電子番号案内サービス、料金明細サービスの開始等があったが、何ととっても昭和63年4月19日INSネット64のサービス開始は印象的なものであった。関西の政・官・財の要人の御参加を得て開始式セレモニーを行なう事ができた。

昭和63年6月、代表取締役副社長就任。担当はネットワーク事業本部（本部長宮津氏）、企業通信事業本部（本部長神林氏）。いずれも立派な本部長が居るので殆どやることなしと思っていた所へ、リクルート事件発生。真藤社長、長谷川データ本部長、式場氏（企通本）という事で、国会でも質疑が行なわれ、国会答弁に駆り出された。

丁度、消費税新設の国会で竹下総理以下関係閣僚が出席、NHKの中継も入る委員会で審議という事で、我々の答弁のせいで重要案件の審議に支障を及ぼすようなことがあってはと、緊張の極みであった。通常の委員会を含め5～6回出席した。まあこれ位やらないと給料泥棒と言われかねない所であった。



結び NTT37年のあゆみを振り返ってみました。若い人から「村上さんて何屋さん？」との疑問があったと聞いたことがあります。伝送屋と認めていただいたのでしょうか？ 矢張り網屋でしょうか？

ハードの仕事はメーカーでも出来ますが、小生のやって来た事はNTTでないと出来ない、NTTらしい仕事をさせて貰ったと思っています。余り能の無い者が良き先輩と廻り会え、ご指導を賜り、良き同僚・部下に恵まれ、お陰で37年のNTT人世を送らせて貰った果報者と思っている次第です。

特別寄稿

図面が画けることはパターンがあること

ICT海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

客先の都合で変更が多いから標準化はできない、パターンもできないとよく言うが、人間のメンタリティから考えてみれば、パターンもモジュールもないものを、客先の希望を入れて作れるはずがない。いままで工事番号別の図面が画けたということは、パターンあるということである。

だから、客先の要求が出るからパターンはできないというのは、バカの言うことである。逆にパターン・モジュールができてから、客先の要求は容れられないとつっぱるのも、バカのやることだ。

フレキシブルなパターンを持っていれば、客先の要求がいくら大きい変化を要するように見えても、ほんのちょっと変えることによって、要求を満たせるものである。

【石井 孝氏のひと言】

真藤さんの設計とは顧客に役立つため設計であり、且つ、モノ造りを容易にするための

設計で、設計のための設計ではない、といているのである。

営業、設計、製造という、営業と製造は現場そのものであるが、設計は、何か、一段上の、ホワイトカラー的司令塔のような存在に見られがちである。

真藤さんは、顧客の要求の真意を汲み取り、それを如何に造り易い形に設計するかが設計の最も重要なポイントであり、設計部門こそ真の現場であると強調している。

このように考えると、パターンとかモジュールの重要性とその意義が、腑に落ちる。

海外グラフィティ

ゲーテ最後の恋 —マリエンバートの悲歌—

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智

身過ぎ世過ぎの慌ただしい毎日を送っていると、ふと、浮世離れた世界に触れたいくなる。日本でいうと江戸時代中期、フランクフルトに生まれ、後期に没したドイツの文豪ゲーテが書き残したものは数知れない。その晩年、74歳の時に、55歳差の19歳の少女ウルリケ・フォン・レヴェッツォーとのほかなない恋を謳ったのが「マリエンバートの悲歌」である。

舞台はマリエンバート、チェコの首都プラハから西へ約125キロの温泉保養地。チェコ名はマリアンスケーラズニェ。庶民の恋物語ではない、王侯貴族が登場人物である。作家・マルティン・ヴァルザーはまるで、ゲーテになり替わったような筆致で心情を綴っている。



「悲歌」そのものは、ウルリケに対し、かなわぬ恋心を切々と歌い、「私からは宇宙が、さらにみずからも失われた かつて神々の寵児だった私、神々は私を試し、パンドラを送りつけた それは良きことに満ち、それ以上に危険をはらんでいた 神々は恵みゆたかな唇に私を押しやり、そして引き離し、奈落へつき落とす」と悲歌は結んでいる。

この小説の中で、興味深いのは、ウルリケの美貌を「緑の瞳」で表現している。緑の瞳は、確率的に全人類の2%しかいないが、ヨーロッパでも北欧に多く、私も実際、テレビ局のスウェーデンロケで美しい現地女性の「緑の瞳」にお目にかかったことがある。たぐいまれなその色彩は、まさに吸い込まれそうな魔力を持っている。

次に興味をそそるのは、「恋敵」の存在だ。ド・ロールという名のフランス人の宝石商。

昼間は女性に対し、あくまで姓しか名乗らないが、夜中になるとファーストネームを発するというプレーボーイぶり。その時は野獣のように女性に挑みかかるという。その点、ゲーテはあくまで紳士の姿勢を最後まで貫く。そこが、物書きの良さなのか、或は弱さなのかのかもしれない。

恋の結末をここで述べるのは、若干憚れるが、自分の主君であるカール・アウグスト公に仲介の労をとってもらって公式に告白したものの、結婚には至らなかったのだ。母親の監視厳しきなかにあつて、娘は、本心を明かさずに生涯を終えている。ところがである。

ヴァルザーの小説の最後の部分「訃報」には、こう書いてある。独身を通したウルリケの最後の様子は次のようなものである。「・・・死の予感の中でウルリケは、誰も中身を知る者のない手紙の束を銀のお盆の上で燃やすように命じた。その灰を銀のカプセルにつめ、貴重な思い出として棺のなかにいれるようにとの希望だった。・・・六時に静かに息を引き取った。彼女の姪の娘が書き残した文書には、それらはすべてゲーテからの手紙であったと記されていた。」

世間の常識を、あるいは、しがらみを、この年の離れた恋人達は超えられなかったとみるべきだろう。その代り、「マリエンバートの悲歌」という形で世に残した。作家は事実と異なった形で、あるいは、オブラートにくるんだ形で恋する相手を作品に込める場合がある。例えば、正岡子規の俳句で「柿くえば鐘が鳴るなり法隆寺」というあまりにも有名な作品がある。「法隆寺に立ち寄った後、茶店で一服して柿を食べると、途端に法隆寺の鐘がなり、その響きに秋を感じた」というのがおそらく一般的に知られた句意の説明だが、事実は、「奈良の宿先で下女の持ってきた御所柿を食べているとき、折から東大寺の釣鐘の音が響いたこと」を記したものらしいのだ。ただ、その柿を剥いだ15歳の宿の女中が非常に美しかったようでそのことをこの句に託したもののようだ。印象に残った麗人をただ脳裏に収めるのではなく、文学作品の中に封じ込めて世に問うというのは、或は物書きの特権であるかもしれない。

技術協力の思い出

KMITプロジェクト

元 JICA 専門家 加来 億一

1. プロジェクトの概要

日本の発展途上国への支援の一環として、JICAがタイにおいて実施した『KMIT ラカバンキャンパスにおける工学部拡充プロジェクト（以下“KMITプロジェクト”と略す）』について報告する。

このプロジェクトはいわゆる“センター方式”の技術協力、即ち専門家の派遣・機材の供与・研修生の受け入れ（タイの研修生を日本で訓練する）の3つをセットで行なわれたもので、1978年12月から1983年8月の4年半余に亘って実施された。

このプロジェクトはタイの工科大学であるKMIT (King Mongkut's Institute of Technology) の工学部の施設を拡充し、教育機関としてのレベルを向上させる事を目的とし、データ処理工学・半導体工学・電力工学の3分野を対象とすることとなっていた。

長期専門家として半導体工学と電力工学の2分野には東海大学の先生が派遣され、電電公社からはデータ処理工学の分野と全体を統括するプロジェクトリーダーを兼務する専門家が派遣された。電電公社からの専門家としてプロジェクトの前半を久保田浩資氏が担当され、後半（1981年6月～1983年8月）を私が引き継いだ。久保田氏はこのプロジェクトの開始前から個別の専門家としてKMITに派遣されていたが、タイ側から本ブ

プロジェクトの要請があり、実施に向けた計画の具体化や両国間の調整に当たられ、プロジェクトの立ち上がったのを確認して帰国され、私に引き継がれたわけである。

2. KMITの歴史

KMITの前身は“ノンタブリ電気通信訓練センター”といい、タイ政府の要請によりJICAの技術協力として1960年に設立され、電電公社とNHKが多数の専門家を派遣し、タイにおける電気通信技術者を養成し、タイ社会へ送り出してきた。



眼に見える形で成果が生まれ、育ち、訓練センターへの期待が大きくなるとともに、センターの組織もレベルも向上していった。さらにこれを発展させるため、タイ政府は他の技術系専門学校（建築技術・農業技術・工業デザイン技術）と統合して工科大学とすることとなった。これがKMITであり、ノンタブリ電気通信訓練センターはKMITの工学部の主要部分を担う組織となった。

KMITとなってからも電気通信分野への技術協力は電電公社を中心にして継続され、教育機関としての充実が図られた。（写真はKMITラカバン構内にある日本・タイ技術交流記念碑。ノンタブリ研修センターに建てられ、その後移設された。高さは約4m）

3. 技術協力の内容

前記のような状況の中で開始された“KMITプロジェクト”の内容を簡単に紹介する。まず専門家の派遣であるが、長期派遣の専門家として、プロジェクトリーダー兼データ処理工学専門家としては先に述べたとおり電電公社から久保田氏および私が、半導体工学専門家としては東海大学工学部の佐藤和紀氏と安村氏が、電力工学専門家としては同じく東海大学工学部の内海達見氏が派遣され、供与された機材の活用と大学スタッフおよび学生の指導に当たった。なお、短期専門家として機材据付工事やその運用指導のため各メーカーの技術者が随時派遣された。

機材供与としては、中型汎用コンピュータとその周辺機器一式およびデータ端末（以上データ処理工学）、電気炉・マスク製造装置・純水製造装置等（以上半導体工学）、高圧発生装置・磁化特性記録装置等（以上電力工学）と当時のタイ国内ではいずれも最高水準の研究設備であった。タイ側で用意することになっていたこれらの設備を設置収容する建物の建設が大幅に遅れ、一部は既存の建物に仮設して運用したが、プロジェクト期間内に必ずしも十分活用することができなかった。

研修員受け入れとしては、機材運用保守のための短期訓練とは別に、大学の人材育成の一環として、KMITの優秀な若手スタッフを日本の大学の大学院に正規の院生として3～4年の長期研修が受けられるという特別な計らいがなされ、東海大学にその受け入れをしていただいた。受け入れていただいたスタッフはいずれも優秀な成績で課程を修了し、学位を得てタイに帰国した。現在もKMITの有能なスタッフとして活躍されているものと思う。

4. 技術協力の成果

ノンタブリ訓練センター以来のKM I Tに対する継続した日本の技術協力は、当時 JICA が実施した世界の発展途上国への数多くの技術協力の中で、極めて数少ない成功例といわれている。即ち、他の多くの技術協力はカウンターパートの個人的な成果や知的財産となり、社会への普及が見られず、技術協力が終わればそこでおしまいというケースが殆どであったが、KM I Tの場合は教育機関という特性もあるが、技術協力・技術指導の成果が着実に社会へ浸透普及している。これはタイ側カウンターパートの努力もさることながら、そのようなカウンターパートを育てた歴代の専門家の方々の努力によるところが大きい。

私が最大の成果と評価していることにKM I Tの大学としてのレベルが客観的に年々向上している事実である。タイには当時工学部を有する大学（すべて国立大学）は6つあり、入学試験は共通であった。従って入学合格者の成績が大学（工学部）の学生のレベルを表していることになる。タイの東大といわれるチュラロンコン大学が当然のように1位を占めていた。しかし、歴史が最も新しく、いくつかのハンディキャップのあるKM I Tが2位を占め、且つ、1位との差を年々小さくしているという事実は特筆すべきことと思う。これはKM I Tへの日本の技術協力（援助）が評判となり、入学希望者が年々多くなり、年々狭き門になっているためである。

余談であるが、1983年のプロジェクト終了を間近に控えて、カウンターパート Dr. Kosol 工学部長（後に学長）の要望もあって、プロジェクトの延伸またはKM I T全学部を対象とした新しいプロジェクト（工学部へばかりの技術援助が続き、他学部からのやっかみがある。全学のバランスを考え、工学部偏重はまずい）による技術協力の継続を画策したが、結局失敗し、プロジェクトは終了せざるを得なかった。外国からの援助等をコントロールするタイ政府の機関（DTEC）からの情報では、他大学から「KM I Tへばかり日本の技術援助を続けるのはいかがなものか」という苦情・やっかみがあり、タイ政府としての正式要請を日本に出せなかったとのことであった。

イタリア俳句紀行

イタリア縦断かつ跳び紀行

元シニア海外ボランティア 北垣 勝之

道程(2013年2月25日～3月12日)イタリア国内移動は全て鉄道、バス利用

4ヵ月前から作戦を練ってきたイタリア旅行に出かける日がきた。家内からボンボヤージュ(bon voyage)と言われても毎度のことピンとこない。「凡々親父」が精々無理をせず無事に戻ってくればよいくらいのメッセージに受け止める。実を言うと花粉飛散のシーズンが迫っている。これに滅法弱い放浪爺は2月下旬から3月にかけて日本脱出を目指すだけである。予算や中東への郷愁もあって、フライトはドーハ経由ミラノ行きのカタール航空に早々決めていた。折しも満月の夜、煌々たる明かりに見送られながら成田空港を発つ。

第2句は五七五頭韻句。

未知の苦の忍ぶ文字通り旅ゆゑに(13-02-26)

道半ばドーハに到着肩が凝る(13-02-26)

長旅苦異界突入衝撃波(13-02-26)

成田からミラノまでの道程でドーハは距離では3分の2だが時間的には中間点になる。というのはドーハで乗り継ぎに4時間かかるからである。すでに12時間の機内缶詰生活、なかなかきつい。肩が凝り腰が痛む。長距離フライトでは当然のことであるが、異次元移動に必要な苦役と悟らねばならない。第1句は「みちのくの忍振摺(シブモヅリ)誰ゆゑに乱れそめしに我ならなくに」(伊勢物語)をもじった本歌取り駄洒落句。第3句は全漢字俳柳。

エコノミーでマラソン王も凱旋す(13-02-26)

成田の搭乗口辺りに屯していた真っ黒い若者が十数人いた。アフリカに帰る連中かな、それにしても日本で何をしていたのだろう。いろいろ憶測しているうちに搭乗開始、私の2~3列前のシートに皆収まる。ドーハに着いて乗り継ぎサテライトへ移動するバスの中でまた一緒になる。彼等の一人の足元に置かれた機内持ち込み品に目をやると、「一等賞」と書かれた付箋がついている。成田を発つ前日行われた東京マラソンの優勝者だったのである。ケニア人のデニス・キメット、タイムは2時間6分50秒、車中で祝福の言葉を投げかける。ついでに彼のスナップ写真も撮った。夜明け前の真っ暗な空港を背景にした真っ黒な人物写真である。3位までケニア勢が独占したレース、その彼等が皆々エコノミーで帰国する。日本人選手はもっとハングリー精神を持たないと彼等には勝てまい。



久方のアララの砂漠は春霞(13-02-26)

ドーハからミラノへの飛行ルートには興味を抱いていた。地中海上空を直行するものと思っていたがどうも様子が違う。ペルシャ湾岸に沿って北上、イラク上空を通過してトルコ東部へ入る。そこから雪山を眼下に黒海沿いに西へ、ブルガリア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチアと横断してアドリア海最北端に出る。ベニスからはイタリア、あとは雪山連山の銀世界パノラマを眺めながら小一時間も飛ばばミラノだ。予想したアラビア半島横断コースではなかったが、春嵐に霞む茫洋とした砂漠を確認できて一安心。

壮大なロマンが招く地球旅(13-02-26)

今なぜイタリア旅行なのか、他の地域でもよいのではないか。今日までかなりの先達がイタリアを旅し、そこに嵌まり、住み着いた者もいる。「何はなんでもイタリア」と熱狂的言辞を發した同時代人もいる。どこにそんな魅力があるのか、実態を暴いてやろうという魂胆があったことは事実である。本来いろんな地球旅を重ね、最後の訪問先に位置付けていたイタリアを急遽繰り上げて実行に移すことにした。人類有史以来、今日の世界形成に大きな影響を与えてきたのはローマ帝国であろう。それまで地域限定の覇権を築いた古代国家からフェニキアが一步抜け出し、地中海交易を通じて版図を広げる。エトルリアの地

方都市に過ぎなかったローマが、自主自立の存続を脅かされ抵抗勢力として台頭してくる。カルタゴに本拠を構えたフェニキアとの三次にわたるポエニ戦争に勝利し、地中海全域を制圧する。その政体は智者賢者の英知を得て歴史に残るパックス・ローマを現出させた。もちろん勇者もいれば愚帝もいる。幾多の曲折と年月を経て近代イタリアへと大成していく。その間ヨーロッパに絶対主義国家が台頭する一方、イタリアは地中海に閉塞し植民地建設に出遅れる。新大陸への進出においてもプロテスタントに遅れを取ったが、イタリーゲッターやマフィアの暗躍で新生アメリカにローマ魂の楔を打ち込む。今日の米国メジャーはジョンブル以上にイタリア系の影響力を見る思いがする。以前私が会ったエクソンの役員もその一人だった。政治経済だけではない、文化芸術・科学哲学などローマが発信したソフィアの諸学がアメリカで開花した観がある。このようなロマンを検証するのが今回の私の旅でもある。

旅に出りや月々火水もっ金々 (13-02-26)

金々:キンキン

極限に立ちて打開の道開く (13-02-26)

パスポートに出国スタンプを押して機上の人となれば、あとは自己責任の世界。何が起きてもすべて自分で対処しなければならない。毎日が緊張の連続である。常に先を読み準備万端怠りなく行動する必要がある。トラブルがあってもプラスに切り返す。予定は予定、突然変異にうろたえている暇はない。自己を極限状態に追い込み、進化へのエネルギーに変えていく。未知への挑戦、それが一人旅の醍醐味に繋がる。

婆は群れ爺は独りの旅婆 (13-02-26)

婆:バア、爺:ジイ

同乗のババア三人姦しき (13-02-26)

夫婦ないし恋人ペアで旅するのはごく普通のこと、しかし一般的に日本人の旅スタイルは、女性はグループ、男性は単独行が多いようだ。しかも近年熟年者の海外旅行が増え、イタリア下りにも大勢やってくる。空港や機内で彼女らの賑やかな話し声がこだまする。ただし、どこか気取っていて高級志向、しがたないバックパッカー爺の趣味ではない。

好きことに人間開化未知世界 (13-02-27)

異国入り知る知る見知る生き甲斐や (13-02-27)

出張など単に義務で海外旅行を行うのとは違って、たとえ艱難辛苦が待ち受けていようとも自分の目的・関心に導かれた一人旅は面白い。まして初めて足を踏み入れる国、異文化の塊みたいな国は見るもの聞くものすべてが新鮮だ。言葉が容易に通じないのも魅力である。何とか理解しようと努力し考えるが故に知見は一層深まる。これこそ旅の醍醐味であり生き甲斐に通じる。

ボンジュールノ・チャオ・グラツィエの三つ語かな (13-02-27)

私の知っているイタリア語は三つだけ、これでは幼気(イイ)ない三つ児にも劣る。ボンジュールノ(buongiorno)「こんにちは」、発音は仏語に近い。チャオ(ciao)「やあ/じゃまた」、グラツィエ(grazie)「ありがとう」、発音は西語に近い。この三語を用いながら、あとは相手によって英語・仏語・西語のチャンポンでコミュニケーションする。怪訝に思う人もいたようだが、これで実際なんとか通じた。かつて、イギリスの語学学校で仲間の欧州人等と街中を「カツオ」と大声あげて練り歩いたり、「オータッタチンコオキネ」などイタ語絡みの

下ネタ話に血道を上げたことはあったが、まともに伊語と接するのは今回が初めてである。

ピザテリア立ち食い定価座ってチップ(13-02-27)

路上食い経世論ずピザ屋前(13-02-27)

レストランや一部のピザテリアではテーブル席に座ると席料(coperto)を取られる。それが嫌なら立ち食い屋で食事をすればよい。味に変わりはない。高級レストランではさらにサービス料がかかる。それとは別に美味しい不味いによってはチップを払うことになる。ミラノで有名なピザ屋ルーニに行く。此処は単なる販売店でテーブル席はない。狭い路地に突っ立って熱々の半円形ピザ饅頭をほおぼっていると、同じようにかぶりついている客の一人と目が合った。20年前に仕事で東京に行ったことのあるイタリア人、同食相哀れみながらイタリア経済を論じる。彼は現下のイタリアは八方塞がりだと嘆く。それを遮って「いやいや観光客は多いし、フェラーリなど自動車産業も悪くない。スポーツ、ファッション、外食産業も盛んだ。それにどの街も人で溢れ活気に満ちているではないか」と反論する。それに対し彼の反応は、「賑やかに振る舞ってはいても表面的なもので、実際観光収入は減少傾向にあり、ちょっと裏に回ればシャッター通り。建設・化学・機械・電気など主要産業は不況のどん底、失業率も高い(2013年1月11.7%)。国家財政は火の車で当然金融関係も良くない。せいぜい農林・食品が横ばい程度で、景気が好いのはこのピザ屋だけだ」と言う。確かに店の前には行列ができ来店制限まで行う。彼の言は正しいようだ。ピザテリアとは私の造語、現地ではピッツェリア(pizzeria)という。

公園や爺婆憩い犬トイレ(13-02-27)

爺婆:ジジババ

油断すな犬糞かしこ都市街路(13-02-27)

昼下がりの都市郊外の公園、そこにたむろするはお年寄りが大半、孫連れもいれば犬連れもいる。問題はこの愛犬家たち、犬糞を放置したまま平然と立ち去る。大都市繁華街でも犬と散歩する気取ったシニョーラ、シニョーレが多い。人ごみをものともせず犬を引きずるように歩く。お洒落な街路にも犬の糞尿があちこち、クソ踏んじやったにならないようにしよう。犬飼族の糞尿処理モラルは欧州一般のことであるが日本より遥かに悪い。

三ツ星もスリッパ歯ブラシ無きホテル(13-02-27)

五つ星ホテルはさて置き三つ星クラス以下では、日本のホテルでの常識的サービスはないのが当たり前。歯ブラシ・髭剃り等の洗面用品、室内スリッパ・靴べら・寝間着は備えられていない。これらは自前を持参することになる。そもそもバスタブはなくシャワー室があればよい方である。今回の旅行で部屋にバストイレがあったのは2カ所、あと4カ所のホテルはバス共用ルームであった。男一匹一夜を明かすにはこれで十分である。

迷惑な名画の価値や没関係(13-02-27)

没関係:メイクアンジー

名画より落書き楽しイタリアーノ(13-02-28)

カラフルに落首落書き駅ギャラリー(13-02-28)

名画「最後の晚餐」を一見しようとミラノの教会を訪れるが、ネット予約が不備だったため閲覧者に加えて貰えない。傍にいた台湾人の紳士が熱心に電話予約を勧めてくれたが、こちらにもプライドがある。たかがレオナルド・ダ・ヴィンチの宗教画一つにあくせくするには及ばない。歴史書や絵画集を見れば十二分に事足りる。先を急ぐ股旅爺には関わりのないことをござんすと諦める。それよりイタリアには、街角や駅構内の扉や壁にたくさんの落書きがある。敢えて消さないところがイタリアらしい。もともと美術・絵画には綺



羅星の如き逸材が幾多の傑作を残してきた。ラファエロやミケランジェロの遺伝子が現代イタリア人に引き継がれ、市井のキャンパスに自由な楽書きとなって息づいているように思える。敷居の高い世界遺産より庶民の落書きの方がはるかに面白い。第1句は頭韻句。

第 20 回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT 海外ボランティア会

協賛 情報通信国際交流会

標記海外情報懇談会を以下により開催いたします。参加をお待ちいたしております。

日 時： **平成 27 年 12 月 10 日 (水)** 午後 3 時～5 時

場 所： **情報通信エンジニアリング協会**
(渋谷駅下車徒歩 10 分、道順は同協会のホームページをご覧ください)
今回は **JTEC ではありませんのでご注意ください。**

講演者：健発科学研究所代表 松本 慎二氏

演 題：「取敢えずの地球二周の船旅の経験から新しい旅・生き方などを求めて」

講演概要：

NTT 退職後、日本電業工作の経営に 10 年間没頭した後、65 歳で、社会的責任のない状態を自分で選択して、直ちに南半球一周の船旅に出た。なんの束縛もなく、100% 自分の好きなように行動できる生活を 100 日経験した。

船旅は安全で楽で楽しい旅をしながら、バラエティに富んだ行動できる素晴らしい旅行方法だ。味をしめて次の年も、北半球地球一周の船旅に出た。一回りもご年配の先輩に、海外旅行は体力のある 70 歳までにやっておきなさい、と助言をいただいた。

現在は 73 歳、まだまだ、数年は旅行を楽しみ、その後も楽しく人生を全うするにはどうすればいいのか、自分なりに、少しずつ答えが見え始めているように思えるこの頃の状況をお話します。

参 加：入場無料 お気軽にどうぞ！(会員制ではありません)

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集担当 加藤 隆 (kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) , または
村上勝臣 (katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp) までお寄せ下さい。

編集後記

・特別寄稿として元 NTT 副社長村上 治さんから海外情報談話会での講演の要約を寄稿していただきました。ご講演やご執筆いただきましたことに謝意を表させていただきます。私も NTT 在職中に大変ご指導をいただきましたので、当時の思いに浸りながら感慨深く拝聴・拝見しました。ファクシミリ網の開発実用化など当時の技術開発方針決定の経緯を知ることが出来、興味深いものがありました。

・いつもながら田上さんのエッセイは気持ちを爽やかに温かくしていただきます。また今号には、加来さんから「KMIT プロジェクト」のご寄稿をいただきました。わが国の技術協力の成功例として語り継がれ、電電からの専門家がその中心となって活躍された様子を紹介していただきました。
(以上 加藤)

・石井さんの「真藤語録」前回に続き設計作業の標準化の話題でした。汎用的に利用できるフレキシブルな標準化ができると工事番号別に設計図面を興すより相当の省力化できる。自分の現役時代の行動に反省しきりです。

・以前、オバマ大統領も「俳句を詠んだ」言うニュースを読みました。俳句は日本の文化として世界に広がりつつあるようです。作風も種田山頭火に代表されるような季語にこだわらない作風もあります。SV 経験豊富な北垣さんのイタリア俳句紀行の一部を紹介しました。
(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣

報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：info@ictov.jp)